



月報No124

いき

2021年11月14日発行
日本基督教団 八ヶ岳教会
〒408-0205
山梨県北杜市高根町
箕輪2265-3
発行人 山本 護

お醤油味のキリスト

牧師 山本 護

「秋の日のヴィオロンのためいき身にしみて」。集会所の軒下で珈琲を飲みぼんやりしていたら、お醤油味の仏蘭西詩がふと口からこぼれ出た。書棚ひっくり返して調べると、正確には「秋の日の／キ`オロンの／ためいきの／ひたぶるに／身にしみて／うら悲し〜」でした。上田敏が1905年に訳したヴェルレーヌの詩で、「Chanson d' Automne」が原題。単純に「秋の歌」なのですが、上田は結びの「とび散らふ／落葉かな」から「落葉」という詩題にしています。日本語といえども明治の美文調で解りづらいので、金子光晴の訳も見てみましょう。「秋のヴィオロンが／いつまでも／すすりあげてる／身のおきどころのない／さびしい僕には／ひしひしこたえるよ〜」。金子訳のほうはずっと身に合っていますが、発話となって口からこぼれ出るのは上田訳です。

ほとんどの教会が「讚美歌21」を用いるようになって、八ヶ岳教会では文語調の1954年度版を使っています。この讚美歌、リードオルガンで歌うと尋常小学校の趣がある。今やほとんど廃校だが、山あいの村の一番良い場所に小学校は建てられました。富国強兵の国策だったにしても、陽当たりいい校庭に立つと村人の祈りが感じられます。

こうしたひなびた祈り、捨てがたい。讚美歌21のように教会歴や典礼を意識した讚美も結構だけれども、未だ開拓途上にある八ヶ岳教会では懐かしく土くさい讚美がいい。私たちの礼拝では「秋の日のヴィオロンのためいき」のように、「身にしみて」讚美したい。村人の祈りのごとくに、口に合ったお醤油味でキリストを讚美したいのです。

「かくて其處をいで、己が郷に至り給ひしに、弟子たちも従へり(マルコ傳6:1)」。故郷の村人は教えを聞いて感心しながら「なんでえ、偉え御方だと思ったら、あすこんちの大工でマリアの倅ぢゃねえか」とイエスを貶めた。すると「イエスは彼らに言ひたまふ〔預言者は、おのが郷、おのが親族、おのが家の外にて尊ばれざる事なし〕(6:4)」と応じた。この寄る辺なくさみしい感じ、私たちにとっても本当の故郷はどこなのか、という大きな問いに膨らんで還って来ます。

「秋の日のヴィオロンのためいき身にしみて」。仏蘭西の詩なのか、もうジャポネの詩になっているのか。ふいに口をついて発話される言葉がさみしい。日本語聖書は口語にとって代われ、文語のようにほろり発話されるさみしさが無くなりました。でもまだ、讚美歌にはあのさみしさが残っている。これからお醤油味のキリストを讚美します。Ω

